

SDGsの達成に向けた共創的 研究開発プログラム

（社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築）

令和3年度公募について

令和3 年 5 月



科学技術振興機構

背景

■ 集団の結びつきの希薄化と個人化・自己責任論

血縁・地縁を基盤とする生活→近代化 伝統的なつながりからの解放

→個人を守ってきた集団の結びつきが希薄化

多くのことが個人の選択に委ねられ、その結果は自己責任のもとに帰される

■ 様々な社会構造の変化に直面している日本

少子高齢化、核家族化などによる世帯規模の縮小、都市的生活様式の浸透、
経済のグローバル化の進展、経済の低成長化等による非正規雇用の労働者の増加



社会的孤立・孤独
社会問題として顕在化

▲ 直接的・間接的な影響により、心身の健康悪化、孤立死や自殺といった深刻な事態が生じる

▲ 多くの人びとが孤立し互いに関心を向け合うことが少ない社会では社会規範の弱体化が進み、逸脱行動が増加、犯罪被害リスクも高まる

課題

- ▲見えにくいこと、**不可視性**
(新型コロナウイルス感染症の流行を受けた対面による接触の減少により加速)
- ▲社会構造の変化により制度の狭間に陥り従来の**見守り活動や支援制度から外れる人の増加**
- ▲当事者に対する**短期的・応急処置的な施策**
- ▲**再現性**のある施策を開発・実装するための**方法論の不足**
- ▲就学者数や就労者数など、**既存の社会規範**に基づいて決められた目標により、当事者本人が**納得できず社会とのつながりを再び失う**
- ▲当事者の**自己責任論**
- ▲**個人情報保護やプライバシー**等に配慮した当事者の情報の取り扱い

新型コロナウイルス感染症の社会的影響

新しい状況下での社会的孤立・孤独メカニズム

- 個人間の物理的な距離の確保⇒
これまで特段、社会的孤立・孤独リスクが高いと考えられていなかった状況にある人々も、社会的孤立・孤独に陥る可能性が生じる
- 新型コロナウイルス感染症の流行を契機として、オンライン化が進行し、人と人との信頼関係や合意形成のあり方が変わる中で、**具体的にどういった層において、どのように社会的孤立・孤独の状況に陥る者が増えているのか**、新しい状況下での社会的孤立・孤独メカニズムを検証し、予防につなげる必要がある

本プログラムにおける社会的孤立・孤独の予防

- 孤立する主体の環境や状況に関連する情報から
孤立状態を可視化して測定し、これに基づき**望まない孤立を予防**
- 目標とするのは・・・
社会としての、孤立を生まない多様なつながり・ネットワークの構築/
孤立してしまう主体にとっての、多様なつながり・ネットワークの構築
- **社会的孤立を主軸**におきつつ、孤独や社会的排除、あるいは幸福度やウェルビーイングといった関連する概念も含めた**多角的な視点**で研究開発を推進

人文・社会科学の知見の活用と社会課題解決型の研究開発

- 人々の行動・心理・社会的背景の分析、さらには、社会的孤立・孤独とは何を意味し、そのこういった側面が問題であるかを精査するための歴史、哲学、人類学的な検討や、国際比較による社会的孤立・孤独を生む日本社会の特質の検証など、**幅広い人文・社会科学分野の知見も活用した根源的なアプローチ**
- 社会的孤立・孤独を生むメカニズムの解明にとどまらず、各分野での個別の取り組みに横串を通し、**戦略的な施策の開発・実装につなげる、社会課題解決型の研究開発を推進**

SOLVE for SDGs 社会的孤立枠

SDGsの達成に向けた 共創的研究開発プログラム (SOLVE for SDGs)



2019年度～ シナリオ創出フェーズ・ソリューション創出フェーズ

「社会的孤立・孤独の予防」に限らず、地域が抱える具体的な社会課題に対して、研究代表者と地域で実際の課題解決にあたる協働実施者が共同で、既存の技術シーズの活用による解決策（事業構想、事業計画等）を創出していくことを目指します。

（社会課題の解決のために活用する技術シーズがすでにあることが必須条件となります）

NEW!!

2021年度～ 社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築（社会的孤立枠）

「社会的孤立・孤独の予防」に関する研究開発であり、その要因やメカニズム理解、新しい社会像の描出といった人文・社会科学などの知見を使った学術的な研究から、社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法（指標等）、社会的孤立・孤独の予防施策の開発とそのPoC（Proof of Concept:概念実証）までを、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場と協働して一体的に実施します。

なお、2021年度は、新型コロナウイルス感染症の社会的影響を踏まえた提案を募集します。

プログラム目標

- 人口減少・少子高齢化、経済変動、新興感染症による影響など、様々な社会構造の変化を踏まえ、社会的孤立・孤独のメカニズムを明らかにすると共に、社会的孤立・孤独を生まない社会像を描出し、人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化や評価手法（指標等）、社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みの研究開発を推進。
- その際、開発した評価手法（指標等）に基づいた、社会的孤立・孤独の予防施策の効果検証を含め、PoC（Proof of Concept：概念実証）までを一体的に行う。
- 本プログラムの実施を通して、人・組織・コミュニティ間の多様な社会的つながり・ネットワークを実現し、社会的孤立・孤独を生まない社会の創出を目指す。

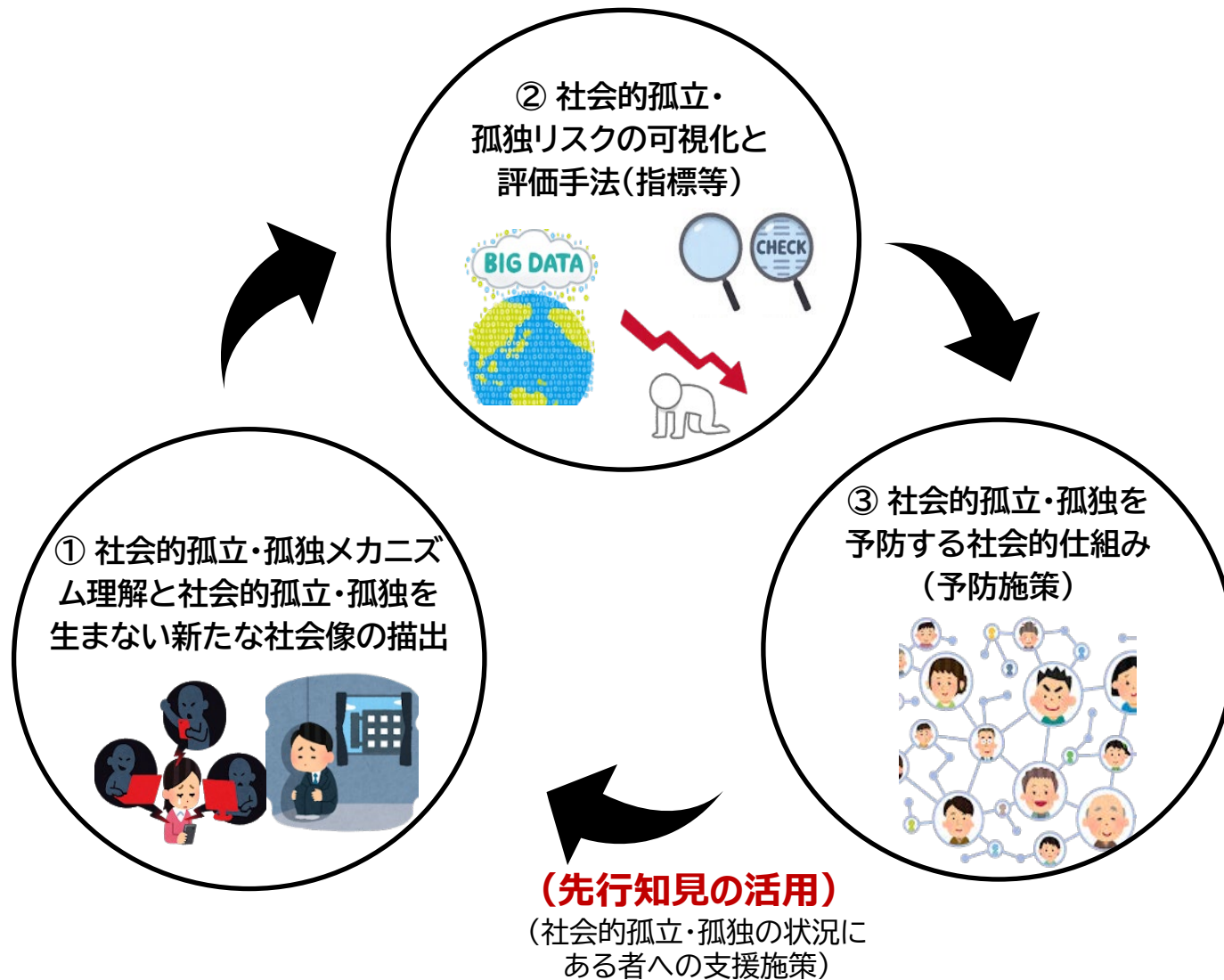
2021年度は、全ての提案について新型コロナウイルス感染症（COVID-19） の社会的影響を踏まえたものを募集

想定外の物理的な分断への対応が迅速かつ十分でないあらゆる場面で、社会的孤立・孤独の顕在化・深刻化。これまで社会的孤立・孤独から無縁だった人や集団も社会的孤立・孤独に陥るリスクが高まっている。



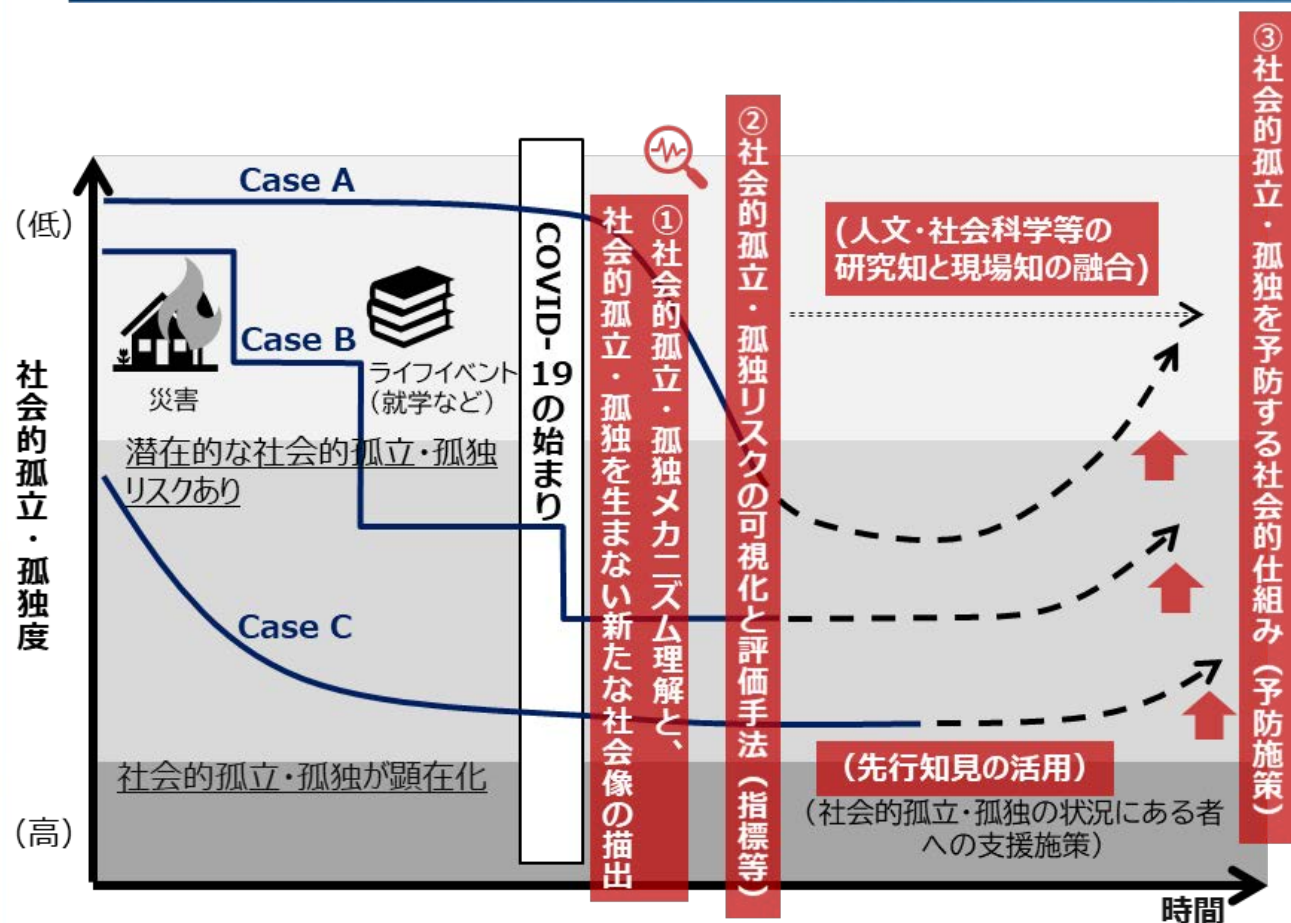
ウィズコロナ・ポストコロナの社会における望ましいつながり・ネットワークのあり方を追求し、これを積極的に構築していく必要がある。

研究開発要素①②③の一体的推進 (1)



- 様々な社会構造の変化を踏まえ、人文・社会科学の知見も活用し、社会のメカニズム理解にまで掘り下げた研究開発が必要なものを対象
- 研究開発要素①②③の一体的推進と、施策現場での**PoC (Proof of Concept : 概念実証)** まで実施
- 概念的な研究に留まることがないように、**国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場と協働**
- 既存の施策の評価等を通じた研究知と現場知の相互作用の促進
- 様々な種類の社会的孤立・孤独の横断的・俯瞰的分析
- ICTや芸術分野など、異分野との融合的な取組の積極的な推進

研究開発要素①②③の一体的推進 (2)



①社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出

人や集団の行動、心理、社会的背景の検証から、どのようなメカニズムによって社会的孤立・孤独が生じるのか、社会的孤立・孤独の状況にある者の視点も考慮した社会のあり方を分析します。その結果を基に、予防すべき社会的孤立・孤独を明確にすると共に、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像を描出します。

②社会的孤立・孤独リスクの可視化と評価手法 (指標等) の開発

①で描いた社会像の実現に向け、まず人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクを早期にとらえるための可視化や評価手法 (指標等) を研究開発します。

③社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み

社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み (予防施策) を開発し、②で開発した社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法 (指標等) に基づいた**評価・実証を、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどを対象に行います。**

Case A: 社会的孤立・孤独とは無縁だったが、COVID-19をきっかけに社会的孤立・孤独リスク増加

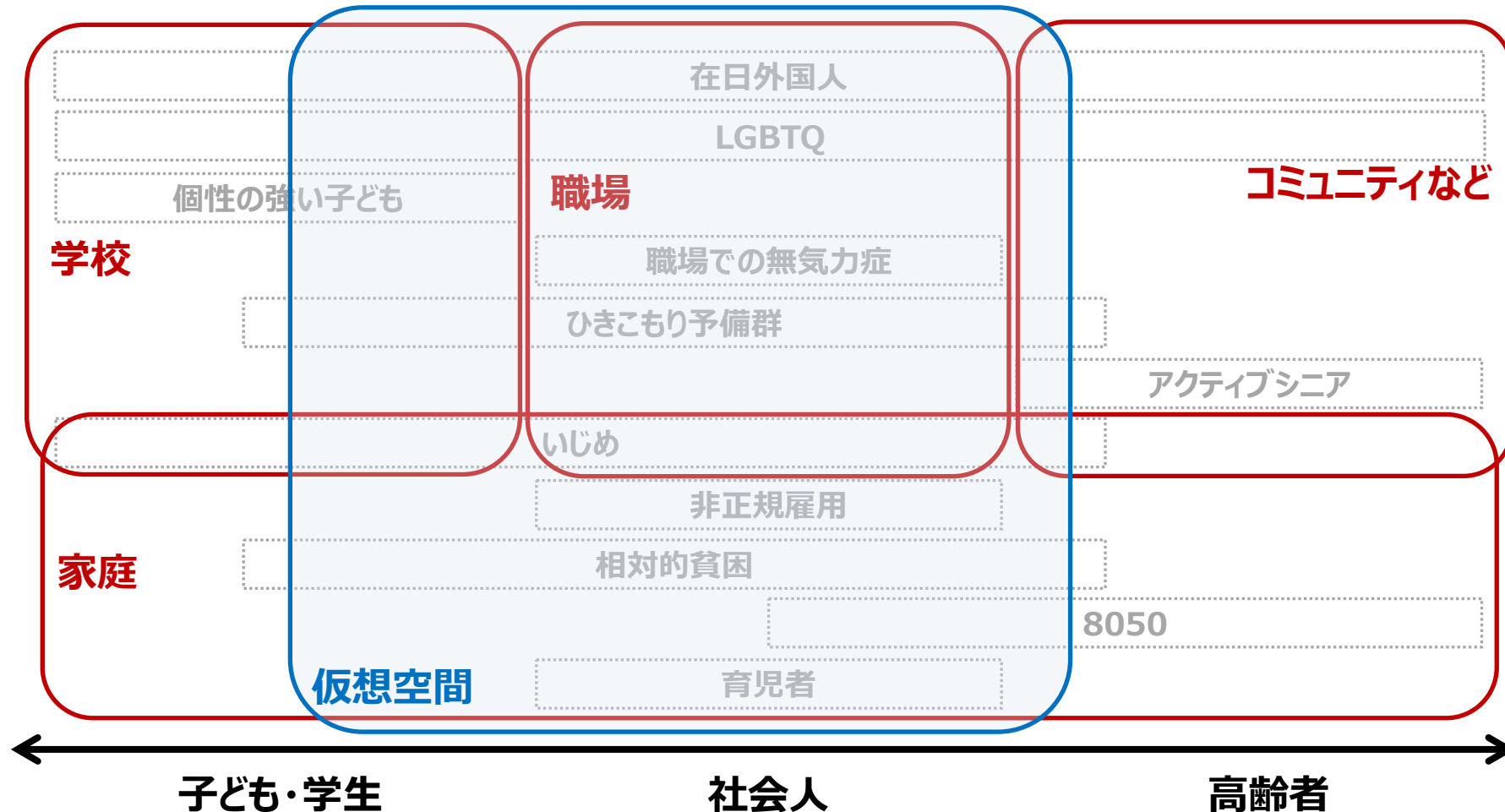
Case B: 災害/ライフイベントをきっかけに社会的孤立・孤独リスクが徐々に増加し、COVID-19より更に悪化

Case C: 所与の環境・障害により、例えば幼少期から社会的孤立・孤独リスク高

「厚生労働省、社会的排除にいたるプロセス～若年ケース・スタディから見る排除の過程～概要 (内閣官房/内閣府提出資料)、

第8回社会保障審議会生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会資料 (平成24年9月28日)」を参考に、RISTEXにて作成

本プログラムにおける課題例ポートフォリオ



本プログラムにおいては、すでに顕在化している社会的孤立・孤独に係る先行知見も活用しながら、横断的な観点から社会的孤立・孤独の予防施策の実現を目指す。なお、本図に記載されていない社会的孤立・孤独に関する提案や、本図とは異なる視点での提案も十分想定される。

提案および研究開発にあたっての留意事項

- 研究開発要素①②③を一体的に実施するためには、研究側と施策現場側の乖離を埋めて、研究と実践を同時進行し、**施策現場から得られた様々な知見を、制度・社会デザインにつなげていく社会実装のための研究**が必要です。そのため、**本格研究開発開始時まで**に、研究側、施策現場側（研究成果の利用者）双方がプロジェクトに参加することが望まれます。
- 人文・社会科学と自然科学の**分野横断的な知見**や、**顕在化した孤立者への支援施策等に係る先行知見**を活用し、ハード・ソフト両面からの包括的、総合的な研究開発を促進することを期待します。
- **研究開発の終了後も発展的な取組が継続的に行われる**ために、**地方自治体、NPO、教育機関などの関係機関との連携を研究開発の初期の段階から十分に行うことが重要です。**
- 研究対象、研究の手法や前提条件、技術開発におけるデザインなど、研究開発のあらゆる側面において**ジェンダーをはじめダイバーシティ**の視点に配慮することとします。
- 本プログラムの掲げる課題は国内のみにとどまらず、現在・将来的に海外も同様な課題があることから、**海外の知見・フィールド・人的資源の活用など海外との協働**を対象とした提案も推奨します。ただし、**開発した社会的孤立・孤独の予防のための社会的仕組みは国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場で実証する必要があります。**

プログラムのマネジメント体制

プログラム総括

■ 浦 光博

(追手門学院大学 教授)



プログラムアドバイザー

(五十音順)

■ 有末 賢

(亜細亜大学 都市創造学部 教授)

■ 石井 光太

(作家)

■ 稲葉 陽二

(元 日本大学 法学部 教授)

■ 岩田 正美

(日本女子大学 名誉教授)

■ 工藤 啓

(認定特定非営利活動法人育て上げネット 理事長)

■ 平田 オリザ

(芸術文化観光専門職大学 学長)

■ 藤原 佳典

(東京都健康長寿医療センター研究所
社会参加と地域保健研究研究チーム チームリーダー)

※必要に応じ、
今後アドバイザーを
追加いたします。

プログラムの全体的な活動

- 採択したプロジェクト間の交流や連携、相互作用を促進する各種企画、プロジェクトを横断・俯瞰する内外関係者との議論の場の設定（合宿/全体会議等）
- 研究開発成果のアウトリーチ活動（成果報告会やWebなどでの情報発信等）

その他、本プログラムでは以下のような活動の実施も予定しています。

新しい社会像の実現に向けた構想の策定、施策現場との接続などの体制構築を促進するために、社会的孤立・孤独に係る多様な専門性や、社会的孤立・孤独の特徴を熟知した施策開発/運用の経験者からなるマネジメント体制により、プロジェクトに対する構想策定への助言、体制強化等を図るための**人文・社会科学研究と施策現場のマッチングやプロジェクトを育てる伴走支援機能**を提供します。

本プログラムのリサーチ・クエスチョンを設定し、社会的孤立・孤独の全実施期間を通して、マネジメントグループ、プロジェクト、外部有識者、成果の受け手・担い手等とプロジェクト横断的に議論を行い、随時問いと答えを見直していきます。

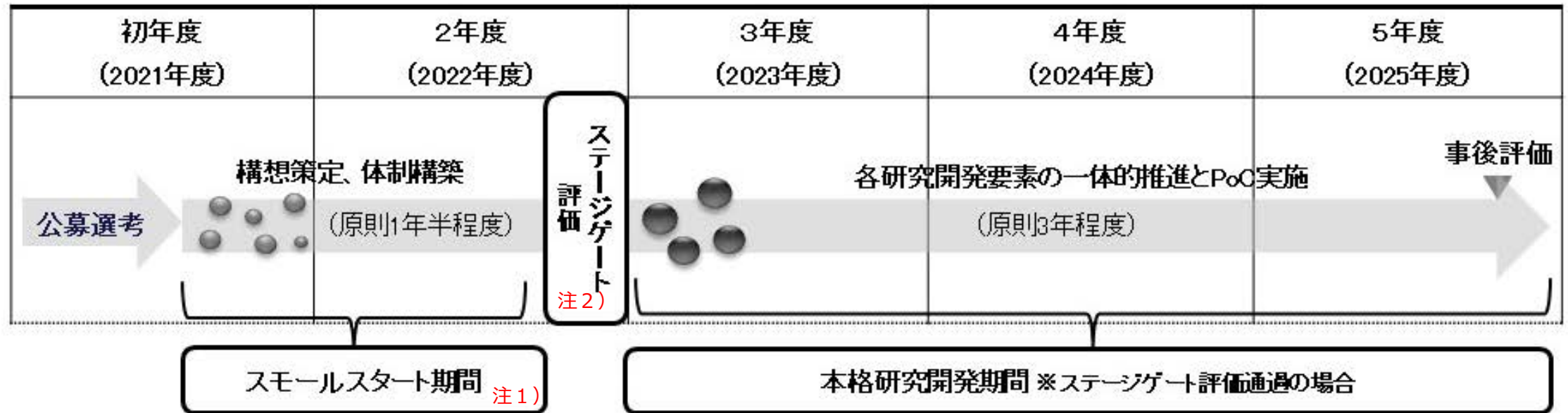
SDGsの達成に向けた共創的研究開発 プログラム

（社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築）

令和3年度公募について（補足説明）

令和3 年 5 月

スモールスタート(可能性検証)/ステージゲート評価



※研究開発成果の定着、展開等の可能性の更なる向上が期待される場合には、評価を経て、2年間を上限として研究開発期間を延長することができます。

注1) スモールスタート(可能性検証) : プロジェクトの採択時には比較的小規模で開始し、本格研究開発に向けてプロジェクトの体制を整備し、PoC (Proof of Concept : 概念実証) 実施を含めプロジェクトの目標達成への道筋を検証する仕組み

注2) ステージゲート評価 : 研究開発をスモールスタートと本格研究開発のステージに分け、スモールスタート期間の評価に基づいて、研究開発の継続の妥当性を判断し、本格研究開発への移行又は中止を決定する仕組み

研究開発期間・規模/採択予定件数

◆研究開発期間・規模

(1)スモールスタート（可能性検証）

研究開発期間：原則 **1年半**程度

研究開発費：**1,200万円/年**（直接経費）程度上限

※ただし、2021年度（令和3年度）に関しては、11月に研究開発を開始する想定ですので、年度末までの5ヶ月間の経費を計上してください。

ステージゲート評価にて、研究開発の継続が妥当と判断された場合、本格研究開発に移行。

(2)本格研究開発

研究開発期間：原則 **3年**程度

研究開発費：スモールスタート期間の予算規模と**同程度～2倍程度**の想定

◆採択予定件数

6件程度（応募提案の内容・状況により、採択件数を調整します）

※**2021年度は、全て、新型コロナウイルス感染症の社会的影響を踏まえた提案**を採択予定

スモールスタート期間に取り組むこと

- 研究側と施策現場側それぞれのニーズや課題の相互理解に基づき、**研究開発要素①②③をPoCまで一体的に推進する計画**の具体化
- PoCの実施を含め、プロジェクトの目標達成に対する**ボトルネックの解決へ向けた道筋**の明確化
- 研究開発要素①②③を一体的に推進するために、人文・社会科学や自然科学の研究者並びに施策現場など**社会の多様な関与者が協働する体制の構築**
- PoC実施のために、開発した社会的孤立・孤独の予防施策等の効果を、**国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティ**などの施策現場で実証できる仕組みの整備
- 研究開発成果が将来もたらし得る**インパクト**（学術的・公共的価値の創出、現在および将来の社会・産業ニーズへの貢献、国内外の他の分野・地域への波及・展開など）の描出

選考にあたっての主な視点(1)

選考にあたっては、以下のようなポイントを重視しながら総合的に検討した上で判断し、採択提案を決定します。提案にあたっては、公募要領「第2章 公募・選考にあたってのプログラム総括の考え方」および「第3章 研究開発プログラムの概要」を必ず参照してください。

a. プログラム趣旨との合致・プログラム目標への貢献

提案された内容（課題、目標、研究開発計画等）は**本プログラムの趣旨に合致し、本プログラムの目標の達成への貢献が期待できる。**

b. 意義・ビジョン

- ・ 解決すべき社会的孤立・孤独の予防に係る**具体的な問題とその社会的背景や原因等が適切に提示**されている。
- ・ どのような社会的孤立・孤独を予防の対象とし、どのような社会を目指しているのか、**そのビジョンが明確かつ適切**である。
- ・ 提案する研究開発の**独創性が具体的に**述べられ、国内外の関連する研究開発や取り組みの動向に鑑み**挑戦的**である。

選考にあたっての主な視点(2)

c.計画の妥当性

- ・ 目指す**目標がアウトカムも含めて適切に設定**されている。
- ・ 目標の達成に向けて**計画（予算規模、期間、マイルストーンの設定やPDCA等のプロセス）が適切**である。
- ・ PoCの実施を含め、プロジェクトの目標達成に向けた**課題・障壁や困難さ等のボトルネックについて想定し、その対応方策についても具体的に検討**されている。
- ・ 社会の動向に対応した**適切な研究開発計画**となっている。
- ・ **多様な関与者からフィードバックを受ける計画**になっている。また、研究開発の節目において、公表等を行い**外部から適切に意見を集め改善すべき点を是正できる計画**になっている。

d.実施体制の妥当性

- ・ 研究提案者は、**プロジェクト遂行のための実績**を有している。また、**構想の実現に必要な手がかり**が得られている。
- ・ 研究開発要素①②③を一体的に推進するために、人文・社会科学や自然科学の研究者並びに施策現場など**社会の多様な関与者による十分な連携体制が構築**されているか、**本格研究開発期間開始時まで**に**構築される見込み**がある。
- ・ PoC実施のために、開発した社会的孤立・孤独の予防施策等の効果を、**国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場で実証できる仕組み**ができているか、**本格研究開発期間開始時まで**に**整備される見込み**がある。
- ・ 研究開発終了後の発展も視野に入れた、**人的・資金的に持続可能な体制が検討**されている。
- ・ **機動的かつ効果的なプロジェクト・マネジメント**が期待できる。

選考にあたっての主な視点(3)

e. 研究開発成果のインパクトとその展開可能性

- ・ 提案する研究開発成果のインパクト（学術的・公共的価値の創出、現在および将来の社会・産業ニーズへの貢献、国内外の他の分野・地域への波及・展開など）が見込まれる。

プロジェクトの選考・採択にあたっては、対象とする社会的孤立・孤独や分野等も考慮するが、さらに以下の点にも配慮することとする。

- ・ 国際的な視点から、国内外の研究動向の中に提案されるプロジェクトを位置づけたうえで、国際的にも有意義な成果の発信が期待できる。
- ・ 若手や女性の研究者の参加・活躍等、人材育成が期待できる。

ステージゲート評価基準

スモールスタート期間から本格研究開発期間に移行する際のステージゲート評価基準は、以下のとおりです。

(a.～c.の項目に基づいて総合的に評価します)

a. 研究開発の進捗状況について

- ・スモールスタート期間における研究開発成果が着実に出ているか。
- ・スモールスタート期間における研究開発成果により、研究側と施策現場側それぞれのニーズや課題の相互理解に基づき、研究開発対象の研究開発要素①②③の一体的推進とPoC実施までの計画が整理されているか。
- ・プロジェクト内のチーム間やプロジェクト間の統合・再編があった場合、その効果と計画について整理されているか。

b. 研究開発体制について

- ・研究開発対象の研究開発要素①②③を一体的に推進するために、人文・社会科学や自然科学の研究者並びに施策現場など社会の多様な関与者による十分な連携体制が構築されているか。
- ・PoC実施のために、開発した社会的孤立・孤独の予防施策等の効果を、国内の特定地域、学校、職場、コミュニティなどの施策現場で実証できる仕組みができているか。

c. 研究開発成果のインパクトについて

- ・研究開発成果が将来もたらすインパクト（学術的・公共的価値の創出、現在および将来の社会・産業ニーズへの貢献、国内外の他の分野・地域への波及・展開など）が描出されているか。

選考スケジュール

募集開始	5月20日（木）
提案書受付期限 （※）	7月20日（火） 正午 ※府省共通研究開発管理システム（e-Rad）での受付期限日時
書類選考期間	7月下旬～8月（予定）
書類選考の結果通知	面接選考会の1週間前までに連絡（予定）
面接選考会	9月22日（水）、9月24日（金）（予定）
総括面談 （採択条件の説明）	10月6日（水）、10月7日（木）（予定）
選考結果の通知・発表	10月下旬（予定）
研究開発の開始	11月上旬（予定）

最新の情報は提案募集ウェブサイトをご参照ください。

https://www.jst.go.jp/ristex/proposal/proposal_2021.html

※ 7月上旬、公開シンポジウム（社会的孤立・孤独を生まない社会を目指して（仮））開催予定
（公募説明もあわせて行う予定）

みなさまのご応募をお待ちしています。

提案〆切 : 2021年7月20日 (火) 正午

問合せ先 : boshu-koritsu@jst.go.jp

**SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
「社会的孤立枠」募集担当
(科学技術振興機構 社会技術研究開発センター)**